

第 60 回クラシックを楽しむ会

2018 年 11 月 18 日（日）16:00～（3 時間 33 分、休憩除く）

タイトル：歌劇「ローエングリン」（ワーグナー）

会場等：バイロイト音楽祭 2018
バイロイト祝祭劇場（ドイツ）
（2018 年 7 月 25 日、プレミエ）

楽団等：バイロイト祝祭管弦楽団、
バイロイト祝祭合唱団

指揮：クリスティアン・ティーレマン

演出：ユーヴァル・シャロン

出演：ピョートル・ベチャワ（ローエングリン）
アニヤ・ハルテロス（エルザ）
トマシュ・コニェチュニ（テルラムント）
ワルトラウト・マイア（オルトルート）
ゲオルク・ツェッペンフェルト（ハインリヒ王）
その他



第 2 幕幕切れ、名前も素性も明かさない騎士に疑念を抱くエルザ



ベチャワ
（ローエングリン）



ハルテロス
（エルザ）



コニェチュニ
（テルラムント）



マイア
（オルトルート）



ツェッペンフェルト
（ハインリヒ王）

ものがたり

ブラバント公国の王女エルザは、奸臣テルラムントから弟殺しの罪で国王に訴えられる。裁きの場に白鳥が曳く小舟に乗った騎士が現れ、テルラムントと決闘して勝ち、エルザの無実を証明して、彼女と結婚することになるが、……。実は、騎士は聖杯守護ローエングリンで、白鳥はエルザの弟ブラバント公。

第 61 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：バレエ「 Coppélia」（ドリーブ）

12 月 16 日（日）17 時 30 分開場、18 時上映開始

2018 年 6 月のボリショイ・バレエ公演。スワニルダの婚約者フランツが心を惹かれた美しい女性は実は自動人形の Coppélia だった。素晴らしいバレエ音楽とともに楽しみましょう。

2019 年 1 月以降、ザルツブルグ音楽祭 2012 「ボエーム」、ザルツブルグ音楽祭 2018 年 8 月の歌劇「スペードの女王」、ザルツブルグ復活祭音楽祭 2018 「トスカ」などを予定。

あらすじ

【時と場所など】

中世（10世紀前半）、ブラバント公国（現在のベルギー、オランダ辺りにあった公爵領）

【登場人物】

ローエン格林： 白鳥の騎士。名前と氏素性は秘密だが、第3幕で明かされる

エルザ・フォン・ブラバント： ブラバント公国の公女

フリードリヒ・フォン・テルラムント： ブラバント公国の貴族

オルトルート： フリードリヒの妻、魔法使い

ハインリヒ王： ハインリヒ・デア・フォーグラウ（東フランク王ハインリヒ1世）

その他

【第1幕】アントウェルペン(アントワープ)郊外のスヘルデ(シュルデ)河畔

ハインリヒ王がハンガリーとの戦いに備えて兵を募るためブラバント公国にやってくる。公国では不和が広がっていた。その訳を国王が尋ねると、ブラバント公の跡取りゴットフリート王子を姉のエルザが殺した、とテルラムント伯爵が告発する。エルザは無実を訴え、夢に見た騎士が現れて自分を救ってくれるはずだと語る（「**エルザの夢**」）。エルザの潔白を証明するため「神明裁判」で戦う騎士を募ると、白鳥が曳く小舟ののって騎士が登場する。エルザのために遣わされたという美しい騎士は、勝利したら自分がエルザの夫となり領地を守ること、自分の身元や名前を決して尋ねてはならないことを告げ、エルザは約束を守ると誓う。騎士とテルラムントが戦い、騎士が勝利する。

【第2幕】アントウェルペン城内の庭、夜

追放されたテルラムントと彼の妻である魔女オルトルートは、騎士は素性を問われると力を失うと見抜き、復讐に燃える。オルトルートはエルザに、素性を明かさぬ騎士は突然姿を消すのではないかと吹き込む。夜が明け、婚礼のため大聖堂へ向かうエルザ（「**エルザの大聖堂への入場**」）に、オルトルートは、裁判で騎士が勝ったのは魔法を使ったからだと呼ぶ。騎士はテルラムントに素性を問われるが、エルザ以外に答える必要はないとあしらう。エルザの心は激しく揺れている。

【第3幕】新婚の寝室、スヘルデ河畔

婚礼を祝う合唱（「**婚礼の合唱**」）に導かれ、新婚の2人が部屋に入ってくる。エルザは愛する人を名前と呼べない辛さを訴え、とうとう騎士に名前を尋ねてしまう。騎士は国王の前で素性を語り出す。彼は、パルジファルの息子で聖杯の騎士、名はローエン格林。素性を知られたからには去らねばならないという。白鳥の引く小舟にローエン格林が乗り、白鳥の首の鎖をはずすと、ゴットフリート王子が現れる。王子は殺されたのではなく、オルトルートの魔法で白鳥にされていたのだ。ローエン格林が去った後、残されたエルザは悲しみのあまり、くずれおちる。

オペラ中の名曲.

それまでのオペラに存在していたアリアが消えて、本格的な総合芸術となり、作品全体を一つのものとして扱うようになっている。

「**第1幕への前奏曲**」はあらゆるオペラの中でも特に名高くしばしば単独で演奏される。

第2幕の「**エルザの大聖堂への入場**」の音楽は吹奏楽編曲による演奏がよく知られている。

「**第3幕への前奏曲**」は「ワルキューレの騎行」とともにワーグナーの代表的なオーケストラ小品としてもよく演奏される。

第3幕の「**婚礼の合唱**」は結婚式では「ワーグナーの結婚行進曲」としてオルガンなどに編曲されたものがBGMとして演奏されるのが一般的で、メンデルスゾーンの「結婚行進曲」とともに名高い。

出演者

ピョートル・ベチャワ（ローエン格林）（1966 - ）はポーランドのテノール歌手。恵まれた美声と、キャラクターに沿ったアプローチで世界中の歌劇場から引っ張りだこ。本公演は期待されていたアラニーヤが降板したためベチャワが代役に決まった。バイロイト音楽祭出演は初めて。

アニヤ・ハルテロス（エルザ）（1972 - ）ギリシア人の父ドイツ人の母を持つドイツ人ソプラノ歌手。バイエルン宮廷歌手の称号も得てキャリアの絶頂期にある。バイロイト音楽祭出演は初めて。ハルテロスは本公演出演の前にザルツブルク復活祭音楽祭 2018(2018.3 ~ 4)でトスカ役を歌っている。

トマシュ・コニェチュニ（テルラムント）（1972 - ）はポーランド生まれのバス・バリトン歌手。ウッチ映画大学を卒業してワイダ監督の映画で俳優デビュー。劇場の芸術監督も勤めている。

ワルトラウト・マイア（オルトルート）（1956 - ）はグラミー賞を受賞したドイツのメゾソプラノ歌手。バイエルン国立歌劇場とウィーン国立歌劇場双方から宮廷歌手の称号を授与され、フランス政府から芸術文化勲章コマンドゥールを受勲している。ワーグナー役で著名。

ゲオルク・ツェッペンフェルト（ハインリヒ王）（1970 - ）はドイツのバス歌手。欧米の主要歌劇場の他、コンサート歌手としても国際的なキャリアを積んでいる。

クリスティアン・ティーレマン（指揮）（1959 - ）はいまや名実ともにバイロイト音楽祭の中心的人物であり、欧米の主要オーケストラにも定期的に客演を重ねている。日本には高校卒業時に観光旅行で訪れていらい度々公演で来日している。

ユーヴァル・シャロン（演出）（1979 - ）はアメリカ出身。本公演の演出： 変電所が舞台、おとぎ話に出てくるような衣装を着た主要キャストはそこに群がる羽の生えた虫たち、民衆は中世の衣装。そして登場したローエン格林は電気技師の衣装！



ティーレマン



シャロン

台本、作曲および初演の経緯

台本は全てワーグナーが書いたものである。パリ滞在中にタンホイザーの着想を得た論文「ヴァルトブルクの歌合戦について」の続きにローエン格林にまつわる叙事詩についての説明を読んだことが発端とされる。その後「オランダ伝説集」のなかの「白鳥の騎士」伝説など多くの文献を参照している。

1846年から1848年にかけて作曲。翌年無政府主義者らとドレスデンの5月蜂起に参加して指名手配され、リストの助けで妻とともにスイスに亡命。余談だが、スイスでは保護者の妻と不倫することになる。

初演はリストの尽力でその翌年の1850年にワイマールで実現したがワーグナーは立ち会うことができなかった。

時代背景

10世紀前半、ザクセン公のハインリヒ1世が東フランク王国の王となりマジャル人（ハンガリー人）との戦いに勝ち、ドイツ王国の基礎を築いた。東フランク王国（ドイツ王国）はランケン、ザクセン、シュヴァーベン、バイエルン、ロートリンゲンの5つの公領で構成された。この当時のブラバントはロートリンゲン宮中伯領でまだブラバント公国は存在していなかった。ハインリヒ1世がマジャル人と戦うためブラバントに出兵を求めたかもしれない。

右図はハインリヒ1世が手に入れた「聖槍」の図。東フランクの部族連合軍を率いてマジャル軍と戦う際に、勝利を招く霊宝としてこの聖槍を陣頭に掲げた。



「聖槍」の図